

神の前では対等

2025・9・16 校長 重枝一郎

先日、本校と同じようなキリスト教主義の学校で学んで、教師の仕事をしている人に会いました。その人が私に自分の中高時代のことを話してくれました。その人が一番印象として残っているのが、中学に入りたての頃の担任の先生の一言だったそうです。ある日、担任先生に呼ばれて行くと、あることについて「あなたはどうお思いになりますか？」と尋ねられたそうです。先生が生徒に敬語を使うことへの驚き、ましてや先生の姿勢は一貫して中学生の自分と対等な感じを受けたそうです。その人は、先生が自分を一人の人間として接してくれていたと振り返っています。時は流れ、その人は教師になりました。教師になったその人は、価値基準として、誰であろうと一人の人間としての存在は全く同じということを、今でも大切にしていると言います。

中高時代というのは言うまでもなく大変難しい時代です。それは特定の個人の問題ではなく、誰でも、いつの時代でも同じです。生徒が、他の誰にとって代わることができない確立した一人の個人となるための格闘の期間になります。その中で、自分自身の人生の核になる部分を作り上げていきます。本校のシンボルワードである「大切なひとり」とはそういう意味になります。その手助けをしていくのが本校教師の役割です。教師は専門の学問を教えますが、それ以外に、社会との橋渡しをしたり、人生の先輩としての経験などをいろいろな場面を通して教えたり、見せていくことになります。

キリスト教主義の本校では、その役割をする場合、生徒という対象であっても、神の前であっては対等な一人の人間として接していくことが求められています。生徒一人一人の「個」を重んじるのは、単に「個性」の尊重ではなく、神によって与えられた人間として生徒を見ることにつながります。教師と生徒という関係であったとしても、神という存在を通して生徒を見て、接して、導いていきます。

さて、その先生は、今現在、福岡市のある中学校で元気に働いています。私にこうも話しました。「私が日々思うことは、自分の目の前にいる生徒は、神が私を人間的に、また、教師として成長していくために必要な存在として、出会わせてくれた大切な存在だと思えます。教師と生徒は、年齢も経験も知識も差があるかもしれませんが、神という存在の前であっては対等であり、相手を神という存在を通して接し導いていくことが大切になります。これが中高キリスト教主義の学校で育った私の根底にあるものです」そして最後に、「学んだことしか伝えられません」とにこやかに話していました。

私は本校の140年間のうち、まだ5年に満たない期間しか過ごしていません。しかし、生徒に「自分は何者？」という自己存在意義を考えさせる「大切なひとり」の教育は、これまでの自分の教員人生でも実践していたつもりです。「神を愛し、隣人を愛する」聖書の教えは、生徒の人格形成に大切だと思っています。私のこれまでがそうであったように、少し敷居が高いと感じてしまうキリスト教も、学校教育を通してだからこそ抵抗なく受け入れられます。そういう事実を感じながら日々過ごしています。本校に関わる多くの人たちもきっとそうだろうと思います。毎朝の礼拝での「沈黙・静寂・讚美歌と聖句」、それは安息の時です。

余談ですが、私は学院全体の理事でもあり、毎月理事会に参加します。その会の始まりにあたり、全員でお祈りをします。その際引用される聖書箇所はコリントの信徒への手紙13章4節です。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」みなさんの話し合いの始まりにでもやってみると、いいマインドセットができるかもしれません。